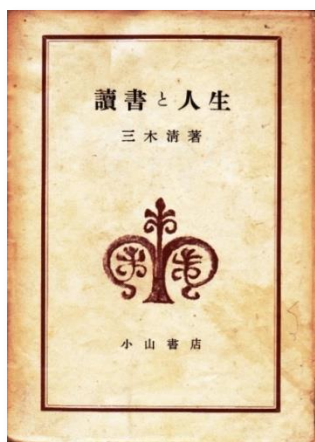




鹿沼の自然・栃木の旅

月報第40号

(2016年1月)



…私どもは教科書のほかに副読本として徳富蘆花の『自然と人生』を与えられ、それを学校でも読み、家へ帰ってからも読んだ。先生は字句の解釈などは一切教えないで、ただ幾度も繰返して読むように命ぜられた。私は蘆花が好きになり、この本のいくつかの文章は暗誦することができた。(中略)このような読書の仕方は、嘗て先ず四書五經の素読から学問に入るといふ一般的な慣習が廢れて以後、今日では稀なことになってしまった。今日の子供の多くは容易に種々の本を見ることが出来る幸福をもっているのであるが、そのために自然、手当たり次第のものを読んで捨ててゆくという習慣になり易い弊がある。これは不幸なことであると思う。(中略)彼によって先ず私は自然と人生に対する眼を開かれた。もし私がヒューマニストであるなら、それは早く蘆花の影響で知らず識らずの間に私のうちに育ったものである。

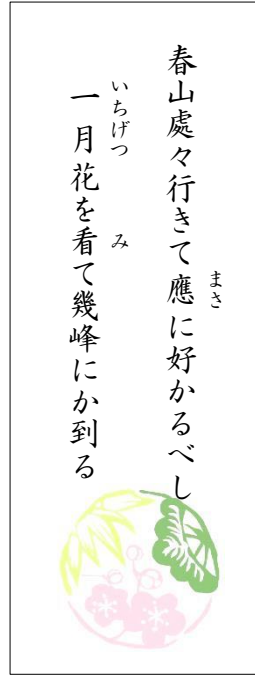
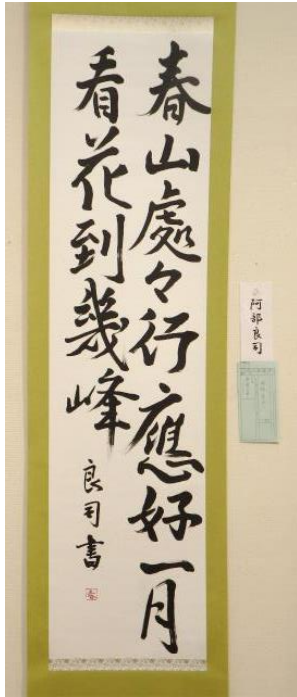
三木清『読書と人生』より、詳細は5頁から

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼



☺ 新年のご挨拶にかえて ☺



(第 43 回鹿沼市民書初展より)

☺ 本号の内容 ☺

新年のご挨拶にかえて	2
山行案内	馬頭・鷺子山ハイキング～神社・仏閣・城跡・横穴墓群探訪～	3
次回予告	4
表紙の本+a	4
表紙の本	三木清著『読書と人生』	5
活動報告	鹿沼・壬生・真岡 ～神社仏閣・古墳・城跡・巨樹探訪と根本山ハイキング～	15
Unique な鹿沼の植物	テイカカズラ	18
愛書家のひとりごと	出会いについて	21
山書談話室	22

馬頭・鷺子山ハイキング
 ～神社・仏閣・城跡・横穴墓群探訪～

那珂川町（旧馬頭町）と鹿沼市を結んでいる国道 293 号線を辿って、茨城県境に跨る鷺子山（標高 470m）を訪ねましょう。登山口から山頂までは 40 分ほどです。

山頂に鷺子山上神社が鎮座しています。社伝によれば 807（大同 2）年、宝珠上人による創建。建久年間（1190～99）に源頼朝によって社殿が造営され、1552（天文 21）年、現在地に移されました。現在の本殿（県文化）は、同年に再興された後、1788（天明 8）年に建て替えられたもので、隨身門（県文化）は、1815（文化 12）年の再建です。

鷺子山ハイキングにはあまり時間を要しないと思われるので、途中、旧馬頭町のいくつかの名跡を訪ねましょう。

国道 293 号線の東側に、南北に延びる那珂川左岸の丘陵斜面にはいくつかの横穴墓群が見られます。その一つ、和見横穴墓群の中で注目される唐の御所横穴墓（国史跡）を訪ねてみましょう。古墳時代の墓といえ、土を高く盛って墳丘をつくり、その内部に遺骸を埋葬する施設を持ったもの、いわゆる古墳がよく知られていますが、凝灰岩や砂岩質の比較的やわらかい岩石からなる丘陵の傾斜面を利用して、横に穴を掘削して墓室とした横穴墓とよばれるものもあります。宇都宮の長岡百穴古墳群もそうですね。

その他、馬頭院（真言宗）、武茂城跡（県史跡）、健武山神社の他、広重美術館や郷土資料館など、時間のゆるす限り、巡ってみたいと思います。

日 時：2月21日（日）AM6:00 北小西門集合

行 程：鹿沼北小 AM6:10—国 293—道の駅ばとう AM7:20—

唐の御所横穴墓—馬頭院—武茂城跡（静神社）—健武山神社
 —坂本（登山口）[Ⓟ]……鷺子山上神社……坂本[Ⓟ]—郷土資料館
 —広重美術館—道の駅ばとう—鹿沼北小

服装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、

ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

参考書（栃木の山 150、栃木県の歴史散歩、とちぎの社寺散歩、
探訪とちぎの古墳）、

1/25,000 地形図は「馬頭」

参加費：おとな 700 円、子ども 350 円（ガソリン代等）

保険料（今年度分）1,300 円

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）



🌀 次回予告 🌀

3月20日（日） 佐野・藤岡 三轟山

4月 3日（日） 東京 小下沢より景信山・高尾山

※ 詳細は追ってお知らせします。お楽しみに。

🌀 表紙の本 + α 🌀



昭和 14 年 10 月頃の三木清（33 歳）と長女・洋子（9 歳）父娘
洋子（永積洋子、ながづみ ようこ）は後に東京大学文学部初の女性教官に。
近世通交貿易史専攻、江戸時代初期の平戸オランダ商館の研究を中心に業績がある。

三木 清著『読書と人生』
(昭和23年1月20日・小山書店発行)

我が青春

—

去年の暮、ふと思い付いて昔の詩稿を探していたら「語られざる哲学」と題する古い原稿が見付かった。150枚ばかりのもので、奥書きには「1919年7月17日、東京の西郊中野にて脱稿」と誌してある。あのころは9月に新学年が始まることになっていたから、ちょうど大学の2年を終えた時で、私の23の年である。

想い起すと、その夏、休暇を利用して東京へ出た私は、相良徳三と一緒に中野に小さな家を借りて自炊生活をした。今の文園町のあたりである。右の原稿はその時に書いたもので、私の生長の心理的過程を告白録風に記している。もとより人に示すべきものではないが読み返してみると自分にはなつかしいもので、青春の感傷や懷疑や夢を綴っている。「しんじつの秋の日照れば専念にこころをこめて歩まざらめや」、などと歌った若い私であった。あのころの中野にはまだ武蔵野の面影が存していた。私は一高を出て京都の文科に入ったのであるが、京都に移っても忘れられなかったのは武蔵野の風物である。山や海よりも平野が私の気持にいちばんしっくりするように思う。

*

京都へ行ったのは、西田幾多郎先生に就て学ぶためであった。高等学校時代に最も深い影響を受けたのは、先生の『善の研究』であり、この書物がまだ何をやるうかと迷っていた私に哲学をやることを決心させたのである。もう一つは『歎異抄』であって、今も私の枕頭の書となっている。最近の禅の流行にも拘らず、私にはやはりこの平民的な浄土真宗ありがたい。恐らく私はその信仰によって死んでゆくのではないかと思う。後年パリの下宿で——それは29の年のことである——『パスカルにおける人間の研究』を書いた時分からいつも私の念頭を去らないのは、同じような方法で親鸞の宗教について書いてみることである。

*

あの頃一高を出て京都の文科に行く者はなく、私が始めてであった。その後、谷川徹三、林達夫、戸坂潤、等々の諸君がだんだんやってきて、だいぶん賑やかになり

仲間の学生の気風に影響を与えるまでになったように覚えている。私が入学した時分の京都の文科は高等師範出身の者が圧倒的で、私の如きは先ず異端者といった恰好であったのである。当時哲学専攻の学生は極めて少く、私のクラスは私と同じ下宿にいた森川礼二郎との2人であった。私が変わっていたとすれば、森川も変わっていた。彼は広島の高師から来たのであるが、大学を卒業してから西田天香氏の一灯園に入ったという人物である。変り者といえば、私の高等学校の同級生で、遅れて京都に来た小田秀人などその随一で、大学時代には熱心に詩を作っていたけれども、暫く会わないうちに心靈術に凝り、やがて大本教になったりしたが、なかなか秀才であった。やはり一高から京都の哲学科に入った三土興三も変り者で、私は彼において「恐るべき後輩」を見たのであるが、自殺してしまったのは惜しいことである。もし三土が生きていたなら、と思うことが今も多いのである。

*

現在の学生に比較して私どもの学生時代はともかく浪漫的であった。時代が波瀾に富んでいたのではなく、青春の浪漫主義を自由に解放し得るほど時代が平和だったのである。(以下略)

読書遍歴

二

私がほんとに読書に興味をもつようになったのは、現在満洲国で教科書編纂の主任をしておられる寺田喜治郎先生の影響である。この先生に会ったことは私の一生の幸福であった。確か中学3年の時であったと思う、先生は東京高師を出て初めて私どもの竜野中学に国語の教師として赴任して来られた。何でも以前文学を志して島崎藤村に師事されたことがあるという噂であった。当時すでに先生は国語教育についてずいぶん新しい意見を持っておられたようである。私どもは教科書のほかに副読本として徳富蘆花(※)の『自然と人生』を与えられ、それを学校でも読み、家へ帰ってから読んだ。先生は字句の解釈などは一切教えないで、ただ幾度も繰返して読むように命ぜられた。私は蘆花が好きになり、この本のいくつかの文章は暗誦することができた。そして自分で更に『青山白雲』とか『青蘆集』とかを求めて、同じように熱心に読んだ。冬の夜、炬燵の中で、暗いランプの光で、母にいぶかられながら夜を徹して、



明治33年8月18日

民友社發行

※ 徳富蘆花については巻末に簡単にご紹介しました。

(次ページへ続く)

『思い出の記』を読み耽ったことがあるが、これが小説というものを読んだ初めである。かようにして私は蘆花から最初の大きな影響を受けることになったのである。

私が蘆花から影響されたのは、それがその時まで殆ど本らしいものを読んだことのない私に初めて接したものであること、そして当時1年ほどの間は殆どただ蘆花だけを繰返して読んでいたという事情に依るところが多い。このような読書の仕方は、嘗て先ず四書五経の素読から学問に入るという一般的な慣習が廃れて以後、今日では稀なことになってしまった。今日の子供の多くは容易に種々の本を見ることができ、幸福をもっているのであるが、そのために自然、手当たり次第のものを読んで捨ててゆくという習慣になり易い弊がある。これは不幸なことであると思う。もちろん教科書だけに止まるのは善くない。教科書というものは、どのような教科書でも、何等か功利的に出来ている。教科書だけを勉強してきた人間は、そのことだけからも、功利主義者になってしまう。

もし読書における邂逅というものがあるなら、私にとって蘆花はひとつの邂逅であった。私の郷里の竜野は近年は阪神地方からの遊覧者も多い山水明媚の地であるが、その風物は武蔵野などとはまるで違っている。その土地で大きくなった私が武蔵野を愛するようになったのは、蘆花の影響である。一高時代、私は殆ど毎日曜日、寮の弁当を持って、ところ定めず武蔵野を歩き廻ったことがある。それはその頃読んでいた芭蕉などに対する青年らしい憧憬でもあったが、根本はやはり『奥の細道』でなくて『自然と人生』であった。蘆花を訪ねたことは終になかったが、彼が住んでいた粕谷のあたりをさまよったことは一再ではない。利根川べりの息栖とか小見川とかの名も蘆花を通して記憶していて、その土地を探ねて旅したこともある。彼によって先ず私は自然と人生に対する眼を開かれた。もし私がヒューマニストであるなら、それは早く蘆花の影響で知らず識らずの間に私のうちに育ったものである。彼のヒューマニズムが染み込んだのは、田舎者であった私にとって自然のことであった。今も私の心を惹くのは土である。名所としての自然でなくて土としての自然である。それは風景としての自然でさえない。芭蕉でさえも私には風流に過ぎる。風流の伝統よりも農民の伝統を私は尊いものに考えるのである。尤も、蘆花の文学は農民の文学とはいえないであろう。私は今彼を読み直してみようとは思わない。昔深く影響されたもので、その思い出を完全しておくために、後に再び読んでみることを欲しないような本があるものである。

五

自分について語ることは危険なことである。それは卑しいことであり、少くとも悪い趣

(次ページへ続く)

味であるといわれるであろう。私は書物について書きながら自分について、また他の人々について書くことになった。どのような本を読んだかは或る意味ですべて偶然的なことである。しかし他方それはまたすべて必然的なことである。この偶然性と必然性をいづらかでも示すためには、人間について、とりわけ自分について書くのを避けることができない。それから生じ易い危険を逃れる手近かな方法は、できるだけ簡単に、事実だけを記すということである。

中学を出ると、私はひとりぼっちで東京のまんなか放り出された。一高に入学した私は、そこに中学の先輩というものを全くもたなかった。そして私はまた卒業するまでそこに中学の後輩というものを全くもたないでしまった。かようなことが我が国の特殊な社会事情において、殊に田舎から出て来た一人の青年にとって何を意味するかは、読者の想像し得ることであろう。そのうえ私の家には東京に知人というものがまるでなかった。その頃は9月の入学であったが、叔父が紹介してくれた保証人に挨拶に行くという父と一緒に途中暴風雨のために東海道線が不通になったので、中央線を廻ってたくさんトンネルを抜け、油煙と汗とに汚れて、飯田町の駅に降りた時の気持は今も忘れることのできないものである。後には次第に学校の友も出来たが、私の心は殆どつねに孤独であった。田舎者の私は、特に父の血をうけて、交際は甚だ不得手であった。学校の寄宿舎で暮して、町に知った家がなかった私には、家庭生活の雰囲気に触れることも不可能であった。結局私は、東京に住むようになってからも、いつまでも孤独な田舎者であったのである。

こうした孤独には多分に青春の感傷があったであろう。孤独な青年が好んで趨くところは宗教である。むしろ宗教的気分というものである。宗教的気分は未だ宗教ではない。それは宗教とは反対のものでさえある。宗教的気分がつねに多かれ少かれ感傷的であるのに反して、宗教そのものは却って感傷を克服して出てくるものである。自分で宗教的であると考えることそのことが既にひとつの感傷に過ぎぬ場合が如何に多いであろう。高等学校時代を通じて私が比較的たくさん読んだのは宗教的な書物であった。それも何ということなく、いろいろのものを読んでいる。キリスト教の本も読めば、仏教の本も読む。日蓮宗の本も読めば、真宗の本も読む、また禅宗の本を読むこともあるという風であった。そうして一種の宗教的気分に浸るということが慰めであるように感じられた。今にして考えると、青春の甘い感傷に属するに過ぎぬものが多い。もちろん私は甘さというものを一概に無価値であるなぞと考えるのではない。それはともかく十分に日本的であるということができよう。『聖書』は繰返して読んで、そのつど感銘を受けた本であった。しかし旧約の面白さがわかるようになったのは、ずっと後の

(次ページへ続く)

ことである。『聖書』は今も私の座右の書である。仏教の経典では浄土真宗のものが私にはいちばんぴったりした。キリスト教と浄土真宗との間には或る類似があると見る人があるが、そういうところがあると考えることもできるであろう。元来、私は真宗の家に育ち、祖父や祖母、また父や母の誦する『正信偈』とか『御文章』とかをいつのまにか聞き覚え、自分でも命ぜられるままに仏壇の前に坐ってそれを誦することがあった。お経を読むということは私どもの地方では基礎的な教育の一つであった。こうした子供の時からの影響にも依るであろう、青年時代においても私の最も心を惹かれたのは真宗である。そしてこれは今も変ることがない。いったい我が国の哲学者の多くは禅について語ることを好み、東洋哲学というときすぐ禅が考えられるようであるが、私には平民的な法然や親鸞の宗教に遙かに親しみが感じられるのである。いつかその哲学的意義を闡明してみたいというのは、私のひそかに抱いている念願である。後には主として西洋哲学を研究するようになった関係からキリスト教の文献を読む機会が多く、それにも十分に関心がかもてるのであるが、私の落ち着いてゆくところは結局浄土真宗であろうと思う。高等学校時代に初めて見て特に深い感銘を受けたのは『歎異抄』であった。近角常観先生の『歎異抄講義』も忘れられない本である。本郷森川町の求道学舎で先生から『歎異抄』の講義を聴いたこともある。近角先生はその時代の一部の青年に大きな感化を与えられたようであった。島地大等先生の編纂された『聖典』は、現在も私の座右の書となっている。

私のみではない、その頃の青年にはいったいに宗教的な関心が強かったようである。日本の思想界が一般に内省的になりつつある時代であった。中学時代の初めに興味をもって読んだ『冒険世界』というような雑誌がいつしか姿を消して、やがて倉田百三氏の『出家とその弟子』とか『愛と認識との出発』とかが現われて青年の間に大きな反響を見出すようになる雰囲気の中で、私は高等学校生活を経てきた。一高にも日蓮宗とか、禅宗とか、真宗とかの学生の会があり、私も時々出席してみたことがある。私の最も親しくするようになった宮島鋭夫に誘われて、或る夏私は彼と一緒に鎌倉の円覚寺の一庵に宿り、坐禅をしたこともある。1日禅坊を出て、宮島の知っている堀口大学氏が浄智寺に来ておられるというので訪ねたことがある。堀口氏に会うといつもあの頃のことを思い出すのであるが、まだ口にしないのである。恐らく堀口氏の記憶には残っていないことであろう。(以下略)

哲学はどう学んでゆくか

哲学はどう学んでゆくかという問は、私のしばしば出会う問である。今またここに同じ

(次ページへ続く)

題が私に与えられた。然るにこの問に答えることは容易ではないのである。これがもし数学や自然科学の場合であるなら、どういものから入り、どうい本を、どうい順序で勉強してゆくべきかを示すことは、或いはそんなに困難ではないかも知れない。それが哲学においては殆ど不可能に近いところに、哲学の特色があるともいえるであろう。哲学は何であるかの定義さえ、立場によって異っている。立場の異なるに従って、入口も異なる筈である。しかも哲学的知識には、端初が同時に終末であるというようなところがあるのである。それにしてもどこかに手懸りがなければ、およそ研究を始めることも不可能であるとすれば、その手懸りが何とか与えられなければならぬ。これはどこに求むべきであるか。立場の相違は別にして、およそ哲学というものを掴んでゆく最初の手懸りは、どこに、どうい風に探してゆくべきか。質問がそこにあるとして、私の乏しい経験に基づいて、少し述べてみたいと思う。

一

いつも先ずきかれるのは、哲学概論は何を読めば好いかということである。何でも好いから1冊だけ読んでみ給え、といつも私は答えるのである。という意味は、概論という名前に拘泥してはならぬということである。哲学概論と称するもの、必ずしも哲学の勉強の最初の手引になるものではない。概論といっても哲学の場合、著者自身の立場が出ており、著者自身の哲学への入門であったり、著者自身の哲学の総括であったりすることが多いのである。そのうえ概論というもの、必ずしもやさしいとは限らない。世間には哲学概論と名の付く書物を幾冊も買い込んで、それに頭を悩ませている人があるようであるが、愚かなことではないかと思う。哲学においては、概論書から入ることを必ずしも必要としないし、またそれが必ずしも最善の道でもないのである。初めに概論が読みたいというのなら、何でも1冊でたくさんだといいたい。何でもというのは、私はそれにあまり重きをおかぬということである。哲学上の用語の意味を知ろうというのなら、哲学辞典がある。またどのような説があり、どのような傾向があるかを知るには、哲学史に依らねばならぬ。もちろん私は決して哲学概論というものを軽蔑するのではない。私がいいたいのはただ、順序として先ず概論の名の付くものを読まねばならぬかの如く考える形式的な考え方にとらわれないということである。哲学に入る道はもっと自由なものと考えて好い。

二

私自身の経験を話すと、高等学校の頃、哲学に関心をもち始めたとき、わが国にはまだ哲学概論と称する種類の書物は殆ど見当らなかつた。私が哲学に引き入れられたのは西田幾多郎先生の『善の研究』によってであった。そして今も私はこの本を

(次ページへ続く)

最上の入門書の一つであると思っている。その頃の高等学校には、文科にも哲学概論の講義はなく、あったのは心理と論理とだけであった。また高等学校の時には、後に哲学を専攻する者も、心理と論理とを勉強しておくものだというのが、私ども一般の考えでもあった。そしてその頃は世界戦争の影響でドイツ語の本は全く手に入らなかったもので、私はジェームズの『心理学原理』とかミルの『論理学体系』とかいったものを丸善から求めてきて、ぼつぼつ繕っていた。それは日本の哲学書出版に時代を画した岩波の『哲学叢書』が刊行され始めた時期であって、その中のヴィンデルバントのものを紹介した『哲学概論』を読んでみたが、正直にいうと、よく理解できなかったのである。三年生の時、小さな会を作って、ヴィンデルバントの『プレラーディエン(序曲)』の中の『哲学とは何か』を謄写版刷りにして速水滉先生から読んで戴いた。高等学校時代、私は直接には速水先生から最も多く影響を受けた。心理学の本を比較的多く勉強したのもそのためであるが、最も興味を感じたのは、ジェームズの『心理学原理』であった。そしてこれは今も私が人に勧めたい本の一つである。ヴィンデルバントの『哲学概論』は概論中の白眉として定評のあるものであり、ぜひ目を通さねばならぬものではあるが、初めに読むものとしては少しむずかしいであろう。この人のものとしては寧ろ初めに『プレラーディエン(序曲)』を読むのがよいと思う。これはそれ自身立派な入門書と見ることができる。ヴィンデルバントの哲学概論と共にわが国で知られているディルタイの『哲学の本質』も、重要なものではあるが、やさしいとはいえない。もちろん、場合によっては、難解な書物に直接ぶつつかってゆくことも、意味のあることである。高等学校を卒業した夏、速水先生の紹介状をもって京都に西田先生を初めて訪問した時、休みの間にこれを読んでみよとって先生が私に貸して下さった書物は、カントの『純粹理性批判』であった。その頃はまだこの本の翻訳も出ていなかったもので、ドイツ語の辞書を引きながら、一生懸命に勉強したが、わからないことが多くて困難したのを覚えている。その後桑木嚴翼先生の『カントと現代の哲学』が出たが、これも入門書として勧めたいものの一つである。(以下略)

如何に読書すべきか

三

如何に読むべきかという問題は何を読むべきかという問題と関連している。ひとは凡ての書物を同じ仕方でも読むことはできないし、また同じ仕方でも読むではならぬ。博く読むためには書物の種類に従って読み方を変えなければならない。そこに読書の技術があるのである。

(次ページへ続く)

何を読むべきかに就いては、もちろん、善いものを読まねばならず、悪いものを読んではならぬということは明かである。悪い本を読むことはそのこと自身無益であるばかりでなく、悪い本を読んでいるうちには善いものと悪いものとを区別することができなくなってしまうという危険がある。ひとはただ善いものを読むことによって善いものと悪いものを見分ける眼を養うことができるのであって、その逆ではない。善い本は必ずしも読み易い本ではない。大きな、分厚な、おつかしい本であるからといって避くべきではなく、その方面で最も善い本を読むように努めなければならぬ。読書においても努力が大切であり、そして努力はつねに報いられるのである。やさしい本、読者に媚びる本ばかりを読んでいては、真の知識も教養も得ることができぬ。一度でその本が全部理解されなくても好い、ともかく善いものにぶつつかってゆくことが肝要である。もし一度で理解することができなければ、暫らく間をおいて再び読むようにするが好い。努力して読書する習慣を作ることが大切である。尤も、おつかしい本、大きな本がつねに善い本であるという風に誤解してはならぬ。それはペダンチックな人の陥る誤解である。善い本は本質的に云ってすべて最も理解し易い本であるというのみでなく、初めから困難なしに読める本にも善い本は多いのである。そして読書において、ぶつつかる困難を克服するためには系統的に読むことが大切である。読書も無秩序であっては益がなく順序を追って読むようにしなければならぬ。先輩の意見を聞くことが有益であるのは何よりもこの点についてである。

一般に何が善い本かといえば、もちろん古典といわれるような書物である。古典は歴史の試煉を経て生き残ってきたものであり、すでに価値の定まった本である。古典は決して旧くなることなく、つねに新しく、つねに若々しいところを有している。古典を読むことによってひとは書物の良否に対する鑑識眼を養うことができるのである。古典を愛しないような真の読書家はなく、古典についての教養を有しないような真の教養人はない。古典はつねに安心して読むことができ、幾度繰り返し読んでもつねに新たな利益を得ることのできるものである。かように価値の定まった本を読むように心掛けねばならぬところから、人々は屢々、古典というほどでなくても既にいくらかの年数を経てなお読まれているような本を読むことにして、新刊書をすぐ手に取ることはやめねばならぬという風に忠告している。これは確かに有益な忠告である。ただ新刊書ばかり漁るのは好くないことに相違ない。しかしながら読書における尚古主義にもまた限界がある。アカデミズムに対してジャーナリズムには独自の意義があるように新刊書を読むということにもそれ自身の意義があるのである。時代の感覚に触れるために、また今日の問題が何処にあるかを知るために、ひとは新刊書に接しなければならぬ。新しい感

(次ページへ続く)

覚をもち新しい問題をもって対するのでなければ古典も生きてこないであろう。すべて過去が活かされ、伝統が甦ってくるのは現在からである。古典を顧みないというのは固より悪いことであるが、新刊書を恐れるというのも正しくないことである。古典は安心して読むことができる本であるに対して、新刊書を読むことは一種の冒険である。しかし読書においても冒険するのでなければ得ることがないであろう。古典を偏愛して新刊書を嫌悪する者において読書は単に趣味的になる傾向があり、一種のデレクタンティズムに陥り易い。しかしまた新刊書ばかり漁って古典を顧みない者も他の種類のデレクタンティズムに陥る危険がある。読書にも年齢があり、老人は古典的なものを好み、青年は新しいものを求めるというのが普通である。青年が新刊書を喜ぶということはその知識欲の旺盛を示すものであって排斥すべきことではないが、しかしそこにはまた単なる好奇心の虜になる危険もあるのである。古典のために新刊書を軽蔑することなく、新刊書のために古典を忘却することのないようにするのが肝要である。

古典を読むことが大切である如く、ひとはまたつねに原典を読むように心掛けねばならぬ。解説書とか参考書とかを読むことも固より必要ではあるが、本質的には原典を中心としてこれに頼らねばならぬ。原典はつねに最も信頼し得る書物である。例えばプラトンとかカントとかについて千の文献を読むにしても、原典を読むこと、これを繰り返して読むことをしないならば、深く根本的に学ぶことができぬ。第三者の書いた解説書よりも原典は本質的な意味においては一層理解し易いものである。多数の参考書を読むよりも一冊の原典を繰り返して読むことがそのものを掴むのに結局近道である。そのうえ原典は屢々解説書よりも短いという利益を有している。原典を読むことは読書を単純化するに必要な方法である。それは何よりも読書の経済化、簡易化を意味している。前に述べた規則的に読むという必要は原典の場合において特に大きいであろう。本はひとに読んで貰うのでなくて自分自身で読まねばならぬとすれば、この自分自身で読むという必要は原典の場合においては絶対的である。然るに世の中には文学上の作品についてさえ、それを自分で読まないで、他人の書いた解説や批評ばかりを読んでいる人が少なくないのである。ひとはつねに源泉に汲まねばならぬ。源泉はつねに新しく、豊富である。原典を読むことによって最も多く自分自身の考えを得ることもできるのである。

原典を読むことが必要であるように、できるだけ原書を読むようにすることが好い。どのような翻訳よりも原書がすぐれていることは確かである。原書の有する微妙な味、繊細な感覚は翻訳によって伝えられることが不可能である。そのうえ翻訳はすでに解釈であるということを知らねばならぬ。ひとは原語で読む困難を避けてはならない。翻訳

(次ページへ続く)

翻訳で読むのが原書で読むのよりも速いということはあるにしても、ゆっくり読むことはそれだけ自分で考えながら読む余裕を与えることにもなるのであり、そしてこれは大切なことである。原書を読むには語学の力がなければならないが、その語学というものも決して手段に過ぎないようなものではなく、却って語学そのものが一つの重要な教養である。一つの国語はその民族の精神の現われであり、その思想の蓄積であるということが出来る。勿論あらゆるものを原語で読むということは不可能であり、またあらゆる場合に原語で読まねばならぬというわけではない。原語で読むことができないという理由でそれを読まないというのは悪い口実である。また翻訳で間に合わせて十分な書物も多い。しかし重要な本はできるだけ原書で読むようにしなければならぬ。翻訳の方が簡単であるからというので原語で読むことを避けようとするのは読書における便宜主義であって、便宜主義は読書においても有害である。

善い本を読まねばならぬことは明かであるにしても、何が善い本であるかを見分けることは容易でない。古典といわれるものは善い本であるに相違ないが、その古典も多数であって選択が必要であり、殊に新刊書の場合においては選択は愈々困難である。自分ですべての本に当たってみることは不可能であるとすれば、読書の指針として他人の挙げた目録とか新刊紹介とかに頼らねばならず、すでに定評のあるものを読むようにしなければならぬ。しかしながら定評とか他人の意見とかにばかり頼るということは危険である。読書においてもひとは自主的でなければならず、発見的であることが大切である。各人は自分に適した読書法を見出さねばならぬように自分に適した本を見出すことに努めなければならぬ。単に自分に媚びるというのではなく、自分に役立ち、自分を高めてくれるような本を読むようにしなければならぬ。各々の人間には個性があるのであるから、一人の人間に適する本がすべて他の人間にも適するというわけではない。読書においても個性は尊重されねばならぬ。一般に善い本といわれるものの中でも自分に適したものとそうでないものが自分の個性によって決ってくる。読書においてひとは何よりも特に古典の中から自分に適したものを発見するように努力しなければならぬ。それによって自分の思想というものも作られてくるのであり、愛読書といわれるものも定まってくるのである。愛読書を有しない人は思想的に信用のおけない人であるとかさえ云うことができるであろう。自分に適した善い本が決ってくれば読書もおのずから系統立ってくるのであって、即ちそれと同じ系統に属する書物を、或いは過去に遡り或いは現代に降って、読むようにすれば好い。固より他の系統のものを読まなくても好いというわけではなく、却って偏狭にならないために博く読むことはつねに必要なことである。けれども無系統な博読は濫読に過ぎない。(以下略)

鹿沼・壬生・真岡

～神社仏閣・古墳・城跡・巨樹探訪と根本山ハイキング～

12月20日（日） 天気・はれ

年の瀬の日曜日、しかも今冬一番という冷え込みの早朝に集まり、行程の前半は鹿沼市南端から壬生町にかけての各時代の史跡巡りで、車に乗ったり降りたり、忙しい日程が展開しました。まずはこの一帯の田園風景の中に点在するという古墳群の中から、北赤塚の判官塚古墳、一面に霜の降りた平坦な田んぼの中にこんもりとした「ひょうたん島」のような盛り土と木立は前方後円墳とのことで、よいしょっとひと登りすれば、西の遠方に連なる低山の上に富士山が憤ましく聳えています。街道脇の土盛りは、江戸時代の一里塚の跡です。かつてここを行き交ったいにしえの人々の息吹に思いを馳せませす。

壬生町に入ってまず羽生田城跡、羽生田小学校と隣接する歓喜院周辺に広がる戦国時代の遺構です。次は壬生寺、円仁生誕の地といえは平安時代です。国指定の史跡である車塚、牛塚は少し大きな雑木山を成して、堀や石室の跡が、なるほど古墳です。この後の愛宕神社を擁す愛宕塚古墳と真岡の中村八幡宮(ここにも古墳がある)は、地元住民が集まって掃除をしたり火を焚いたり賑わっていて、日頃からよく手入れされている様子ですが、今回は年の暮れの大掃除で、しめ縄や正月飾りが用意されていました。方方で同じような煙が立っていて年の暮れを実感します。

行程後半の根本山は、時間も過ぎていたので車で登ってやっと昼ごはん。真岡市がビジターセンターを設け、自然観察の拠点として整備しています。希望者は簡単なバードカーヴィング体験ができ、メンバーの半分もここで可愛い小鳥のキーホルダーを作り、残り半分は「山頂」目指してさらにしばらく車道を登って行きます。今日初めての山歩き？ 冬の弱々しい光の中でシキザクラが細々と咲いていました。

冬至前の夕暮れはさすがに早く、鹿沼目指して進むうちにすっかり日が暮れてしまいました。



車塚古墳の「山頂」にて
一見、雑木林の小山である

参加者

佐々木伸二、小島美穂、阿部良司・みゆき（計4名）

✿ 見た植物

磯山神社のスギ、北赤塚一里塚のエノキ、羽生田城跡のセンダン、歓喜院のツガ、
 壬生寺のイチヨウ・ボダイジュ、車塚古墳のシンジュ（ニワウルシ）、
 愛宕塚古墳のケヤキ、中村八幡宮のケヤキ・クスノキ・カシワ、荘厳寺のトウロウバイ
 根本山のネズミサシ・シキザクラ・フユノハナワラビ

✿ 写真集



広々とした田園に立つと
 ↑遠くにかすかに富士山が…奥白根山も見えた↑
 ←磯山神社の夫婦杉 北赤塚一里塚とエノキ→



北赤塚の田んぼの中の判官塚古墳（前方後円墳）
 小高い丘の中腹に横穴式石室入口のくぼみ（矢印）が見える

↓判官台一里塚の石塔群



←羽生田城跡近くのセンダン
 ✓ 歓喜院山門
 ↓ 歓喜院のツガ



磐裂根裂神社の
 鳥居正面に
 判官塚古墳が
 見える→





壬生寺山門



山門の飾り瓦 (左と右)



壬生寺本堂

ボダイジュ→



車塚古墳の堀と土塁



車塚古墳を歩く
↓石室入口



シンジュ (ニワウルシ)



愛宕神社のケヤキ



中村八幡宮のクスノキ



同カシワ



荘厳寺鐘楼
いろいろな像や碑があり
境内はまるで
信心のテーマパーク



根本山で見たネズミサシ (左) とシキザクラ (右)



真岡市立
根本山自然観察センター

テイカカズラ

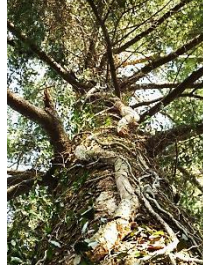
テイカカズラは里山に行けばどこでも、地面にはっているつると、その対生について楕円形の小さな葉を見つけることができる。しばしばスギやヒノキの林床で見かけるのは、スギやヒノキの幹がまっすぐに伸びているので障害なく成長できるからであろう。どこでも見られる植物でありながら、テイカカズラはその花や実を見る機会は少ない。考えてみれば当然ながら、この植物は常緑の樹木なので、樹齢を重ねて幹が太くならないと花を付けないのである。したがって5月頃、スギ・ヒノキの林でその幹に伝い登っているテイカカズラがあればその林冠で花を咲かせているかもしれない。樹木の葉は幼樹と成木で、その葉の大きさや形の異なるものが思いの外多いものである。テイカカズラの林床をほう幼樹の葉は長さ1~2cm、幅5~10mmと小型で波状の浅い鋸歯があり、脈沿いに斑が入るので、この特徴を知っている人は多いと思う。それに対して林冠に達している成木の枝の葉は長さ3~7cm、幅1.5~2.5cmで全縁すなわち鋸歯がなく、濃緑一色。同じ常緑つる性のツルマサキはその成木の葉こそ鋸歯があることからしてテイカカズラとは違うが、幼樹の葉は脈沿いに斑が入ることさえテイカカズラと同じで、その区別は難しい。

ドジョウインゲンのような細長い実を必ず2本組でぶら下げる(背景参照、実物の半分大)。これは当然ながら花が対になって咲くからであり、元を正せば、葉の付き方が対生であるからだ。花は葉が変化してできたのが由縁である。冬になって乾燥が手伝い、そのさやはねじれて2つに割れ、中から冠毛を付けた種子が放出される。

樹木に寄りそってはい上っている若木のツルを引っぱって見ると、たしかに何かではり付いている。若い枝もすでに気根を出しながらはい上っているのである(右頁写真①②)。幹は成長するにしたがって多くの気根を出し、強力に張り付いてくるが直径2cm位になるとしだいに気根は消え、白い平滑な樹皮となる。千手山山頂の南側に落ちる堀の周辺ではヒノキやモミの幹に張り付いたテイカカズラが直径10cm程に成長しており(写真③)、倒れた樹木にからみ付いたツルには花や実を見ることができる(写真④)。同じツル性植物といってもそのはい上り方、寄りそい方はさまざま、そんな特徴を調べてみるのも楽しそうですね。



① テイカカズラの①枝



② 這い上がるツル
(いずれも千手山にて)



③ 太い幹



④ さやが割れて
冠毛を付けた種子が
放出される

諸文献にみるテイカカズラの考察

大言海 大槻文彦

定家葛〔謡曲の定家より名とすとぞ。或は云う、庭下かと〕

蔓性の灌木。山野にあり。物に絡^{まと}いて延ぶ。葉は長楕円形にて両対し、冬、凋まずして、紅紫色に变ず。夏、葉の間に細そき茎を出し、枝を分ちて、五弁の花を開く、大きき銭の如く、色白くして、後に黄となる、香氣あり、莢果^{さや}を結ぶ。

絡石〔謡曲、定家「是は式子内親王の御墓にて候、又このカズラを定家葛と申し候」〕

和漢三才図会、96、蔓草類「絡石、ていかかずら、云云、和名、豆太、俗云、定家葛、相伝、黄門定家卿之古墳石生、因名之、葉似藪柑葉、而無刻齒^{キアワフツツ}」

牧野日本植物図鑑 牧野富太郎

其小形葉の者を特にセキタガズラと呼ぶ、葉形履物の雪駄に似たるを以てなり。本種は往々赤変せる葉を交ゆ、古えマサキノカズラと呼びしは此者なり。花戸にてチョウジカズラと呼ぶ者畢竟同種なり。



樹木和名考 白井光太郎

大和本草に云、絡石(テイカカズラ)其葉橘の如く、又五味子に似たり、花は梔に似て小なり、白し、歴年久者は四五月に小白花さく、香あり、其蔓細くながし、垣及石にはう、花五出毎片其末皆戻れり、異花を為し石にあるを葉に用ゆ、

(次ページへ続く)

国文学に現われたる植物考 松山亮蔵

絡石は諸国の山林中に生い出でて蔓は地錦(ツタ)に等しく、よく木石を包絡するによりて絡石の漢名あり。万葉に石綱即ち「いわつな」とあるはいわつたに等しくして今の世の「ていかかずら」に当れる由、伊藤圭介翁のいわれたり。

谷せばみ峰辺にはえる石綱のはえてしあらばとしにこずとも(万葉集・読人不知) いわつなのまたをちかえりあをによしならの都をまたみておかも(万葉集・読人不知)

果実は長さ5-6寸許ある莢にして、其形「じろくさぎげ」に似たるより、又の名を野豇豆或は山豇豆などともいうことあり。裂開する時は綿の如き白絮を吐き、毎絮に1個の種子つけり。葉の形は、梔子に似て僅に小さく、冬を通じて枯れず。花冠の縁辺は五裂して、各裂片の回旋上に排列せるなど、亦梔子の花に似て乳白色を呈せり。



路傍植物志 恩田重信

此の草、^{ツタ}蔦の如く樹や石に絡みつくが故に懸石、絡石の名を得たり在昔藤原の定家卿此の草を特に愛し其の書齋の周壁垣牆に^{はわ}匍せ付けられたので世人、此の草を^{テイカカズラ}定家藤と呼び^な倣したと云ことである、併し此の草の葉、真中に少し^ふ斑があって、全景が宛も^{せった}雪履に似ている所から、セツカズラと呼ばれたと云うが、これは付会の説だろ、本統はセキダカズラと呼ぶのであるが、実は此の名の義も未だ考に及んで居らん

万葉植物 小清水卓二

山地に自生する蔓性常緑植物で、大きくなると茎に細かい気根を密生し、他物に付着して上昇する。葉は対生し、長楕円形で光沢を有す。花は5月頃開き白色で五深裂し、「くちなし」の花に似ている。果実は細長い莢果で種子には長い絹糸状の毛が密生している。「ていかかずら」は丁子花蔓の意

その他、『植物歳時記』(日野巖)、『草木おぼえ書』(宇都宮貞子)にも詳しく触れられている。

出会いについて

自分がこの世に生まれてきた時、親と出会わなければ今の自分はなかったであろう。そもそも父親と母親の出会いがなければ、自分が生まれることはなかった。出会いは人の存在の根源であると言える。そしてまた人の成長は人との出会いの上にある。人は人との出会いによって成長するものである。

本との出会いもまた、人との出会いである。所詮会話で人の思想を計り知ることにはできない。しかし私たちは書物を読むことで人の思想を知ることができる。そしてある人の思想を読み取り、さらに身をもって体現できたときに人は思想を獲得するのである。

私たちは書物から計り知れる思想を無視することができる。しかし、書物は私たちを無視することはない。私たちは好きな書物を読むことができるのである。書物を読んで言葉に出会うのである。言葉との出会いは人との出会いである。私たちは人と出会い学び、成長するのである。学ぶことは知ることである。人生において知ることは過程である。一方で目標である。人は知るために生きるのである。

出会いのページを1枚1枚めくってみる。あの電車の中で隣に座った人、あの山で出会った人、高校の先輩、学校の先生や同級生、そして家族。出会った人1人1人のページを見るたびに語り合ったことを思う。そのページはその人の人生においては取るに足りぬ1ページであろう。しかし、自分の人生において、それは大切な1ページである。その人の生き方に対していただいた感銘、時には怒り、時には好意、その1頁1頁によって自分の人生は成り立っているのである。

既知の人であっても、また家族であっても、新たな出会いというものがある。あるいは日々が出会いであるとも言える。既知の人であっても、この人にはこんな一面があったのか、と感心することがある。出合いは過程であり、別れるまでは出会いである。そして出会いがなければ別れを哀しむこともあるまい。別れはまた出会いの一端である。

出会いはめぐりあわせであり、仕合せであり、好運であり、さいわいであり、幸福である。
(阿部良司)



白坂正治氏にあてて、田部重治特集号への原稿執筆、また連載「山旅と文章～田部重治の著作巡禮」への書影提供と原稿執筆をお願いしたところ、年賀状を兼ねて次のようなお便りをいただきました。

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしく御願い申し上げます。年末から年始にかけて好天が続いていますので、初日の出はすばらしかったことでしょう。

年の終わりに古本漁りいっです。こちらは同時期は新宿京王で開催されましたがこ2年ほど休止で残念です。

御手紙の御依頼の件ですが、私は研究会以外の様々な方による田部重治へのアプローチに大なる関心を持っています。したがって阿部様にこそ『鶴のやうに』への御寄稿を望みます。私の田部重治論は7号からの『鶴のやうに』又は「田部重治の登山と英文学」中の趣旨説明に綴っていますので、それを自由に貴誌の特集で料理(?)して頂ければ幸いです。書影につきましては研究会編として「書影目録」の刊行を目指しています。ただ改訂・補訂がないよう、又できる限りベストな状態を保っているのと思っているものですからなかなか進みません。「山と溪谷」の重版も全点蒐集できていません)

寄稿させて頂けるのでしたら特集後に「田部重治特集に寄せて」の方向性は如何でしょうか。

'16 1/2

白坂正治

誌面を借りて、阿部良司よりお返事差し上げます。

お葉書ありがとうございます。

一定の著者の作品をまとめた著書目録が本になっている、というのはこの世に何冊あるのでしょうか。私の知るものでは日本山書の会の「山書研究 第25号」として発行された金子民雄編の「ヘディン著書目録」だけなのですが。これさえ、書影は口絵としていくつかの原著がモノクロ写真で載っているだけです。先日ヘディンの「探検家としての余の生涯」の翻訳本を入手したのですが、この時代(昭和17年)の翻訳本の書影、例えばヘディンの翻訳本の書影を集めただけでも、印刷技術の飛躍的に進歩した今日では見て楽しい本ができるのではないかと考えるも

のです。

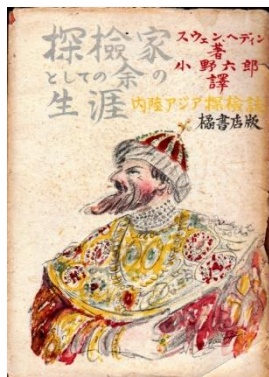
田部重治の書影入り著書目録。田部の著書の表紙は地味ながら、知られた山岳画家による絵画も多く、それが一堂に会すれば、静かなる山旅を愛する人々にとって好ましき1冊になることでしょう。

完結されることを楽しみにしております。

「田部重治特集号」では「鶴のやうに」また「田部重治の登山と英文学」、大いに利用、引用させていただきます。

「田部重治特集に寄せて」、よろしく願いいたします。

「東武古書の市」は会場は以前の半分になってしまいましたが、今回は栃木県の郷土関係の本が特に充実していたように思います。



昭和 16 年 8 月 25 日
橘書店発行

阿部良司

☪ 読者からいただいたおたより ☪

いつも貴重な情報を提供くださっている奈良県の山口さんから、前号の掲載記事に対するコメントをいただきました。今後も誌面を工夫していこうと励まされます。

新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

(中略)

月報第39号は、ページにうまくおさまったものだと感心しています。それに、誕生石の原石のすてきな写真までそえていただきありがとうございます。

古い時代は、写真のような原石を持っていたと思います。なにせ、カットや研磨の技術がなかった時代ですから、ふさわしい写真だと思います。 (山口龍治)



※ 徳富蘆花について

とくとみ ろか、1868年12月8日（明治元年10月25日）—1927（昭和2）年9月18日。明治・大正期の自然主義・人道主義の小説家。本名健次郎。号は、清少納言が「蘆の花は見所とてもなく」と書いた、その見所なきを却って愛するがゆえという。

肥後国葦北郡水俣村に生まれ、同志社英学校に学ぶ。キリスト教の影響を受け、トルストイに傾倒。兄で思想家・ジャーナリストの徳富蘇峰（猪一郎）の民友社で下積みした後、自然詩人として出発し、1900（明治33）年、小説『不如帰』がベストセラーに、また随筆『自然と人生』の文章が賞賛され、一気に人気作家となるも、国家主義的傾向を強める兄とは次第に不仲となり、やがて絶縁状態に。

1906（明治39）年12月10日の最初の講演以後、旧制・第一高等学校の弁論部大会での講演に影響を受けた学生は多い。

日露戦争後、トルストイ訪問の旅から帰国すると、1907（明治40）年、東京郊外の北多摩郡千歳村字粕谷（現・東京都世田谷区粕谷）に転居、半農生活を始め、死去するまでの20年間をこの地で過ごす。

1927（昭和2）年、病に倒れ、伊香保温泉で蘇峰と再会して和解、「後のことは頼む」と遺言して狭心症のため死去したという。享年58歳。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第40号

2016年1月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

